

# 風のように

甘木教会

主任牧師：崔大凡

牧会委嘱牧師：竹田孝一

---

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。 マタイ福音書11：28

## 【説教要旨】

「人生は重荷を負うて往くがごとし」という有名な徳川家康の言葉があります。私たちがこの言葉に共鳴できるのは家康ほどではなくても少なからず、私たちの人生も重荷を負ったものであるということではないでしょうか。

今日の日課の口語訳聖書を読みますと、「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。」とありますように、すべての者が重荷を負い、苦勞しているというのです。例外などはないというのです。長い人生の中で、私たちは肉体的、精神的病気、お金、老いること、死ぬことまた逆に生きるということなど実に重荷をおって、苦勞し、疲れることがあるのではないのでしょうか。

先日、生まれ育った街を散策しました。ふと、足を止める家がありました。親の離婚で、次の母親とそりが合わないことで苦しんでいた友人が祖母、祖父に預けられた家でした。自分にはどうしようもないところで、人生の重荷を負い、苦勞し、疲れていく、そんな人生が誰でもあるし、彼にも起こっていたのです。それを紛らわすために私が想像できない行動をしていました。苦しくなると私の所に訪ねて来てはなぜ、なぜと問うて

きました。しかし、若い私には応えられず、また寄り添うことも出来ないほどの深いものでした。

ここで「軛を負い」という言葉があります。本来、軛は、牛やロバが働いているときにつけられているもので、しんどいものです。仕事を終え、休むときは軛をはずすのですが、「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」とあるように軛を、しんどい思い、重荷、苦勞を負えとイエスさまは言うのです。負ってこそ、「安らぎを得られる。」というのです。

ここでみ言葉に注意しましょう。「わたしの」、つまり「イエス・キリストの」という言葉がついてきます。

わたしたちが負っている軛はわたしの軛でなく、イエス・キリストの軛であるというのです。わたしたちが負っている重荷、苦勞はただ一人で負うなら耐え難いものです。負うことなど到底できないものです。イエスさまは、それは「わたしの—イエス・キリスト」の軛と言われるのです。わたしの負う重荷、苦勞はわたし一人のものではなく、イエスさまと共に負うのであるということです。

「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」と言われるように、イエスが負っていてくださる、重荷、苦勞を。わたしたちがなぜ軛が軽くなるかというとなわたしたちが背負いきれないような重荷をイエスさまにわたしたちが委ねるからです。わたしたちの罪は重荷を、勞を自分一人で負っているということではないでしょうか。イエスを知ったわたしたちが学ぶことは背負いきれない重荷をイエスに委ねるということではないでしょうか。「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。」とはこういうことです。

イエスさまが背負ってくださる、ここにわたしたちの休みがあるのです。

死の病、結核に襲われ八木重吉は、その病気が娘の命をも奪ってしまうという苦しみまで負されました。病気はまた貧しさをもち、この苦しみの重荷に増します。詩います。

むつかしい路もありましょう。

しかし、ここに確かなわたしに出来る路がある

救ってくださることを信じ わたしを投げ出します

私たちが生きていく、それは実にむつかしい路であるかもしれない。しかし、この路にいつも共にいて路を開いてくださるイエスさまがいます。ただ、わたしたちはそのイエスさまに身を投げ出す、委ねることです。ここに「休み」があるのです。

「休む」という言葉は静止して止まっているということではなく、これからやるぞという生きる力を得るような休みです。わたしたちは難しい路を歩んでいます、これからやるぞといって一歩を、一歩を踏み出す確かな路を歩んでいます。

イエスさまは私たちの重荷、苦勞をご存知です。そしてだれもが、「**疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。**」というイエスさまの招きを受けています。

わたしたちは重荷と疲れで悲劇的な諦めや反抗的な怒って歩む生き方と違い、人生の苦悩に対して、それがたとえ暗い谷間であっても、「わたしの軛」は、共に寄り添ってくださるイエス・キリストとの軛であって、出会いです。

友人は、イエスさまから逃げようとするといつもそこにイエスさまがおられて逃げるが出来なかったと信仰を告白しました。これこそが、**休ませてあげよう**というイエスさまの出来事です。イエスは捉えていてくださいます。

# 牧師室の小窓からのぞいてみると

## 自動車保険申し込みから



自動車保険の申し込み手続きをして、社会の大きな変化を感じた。まずは、引き落としの手続きはバーコードをスマホで読み取り、ここに必要なデータを打ち込む。後に保険書が送られてくる。同時に車のドライブレコーダーも送られてくる。これもスマホで管理されアプリを入れる。JAFに加入もカードによって加入する。

すべてが、情報通信システムに管理されていく。そんな手続きをしているとき変なメールがやってくる。「うん」と不安になる。アプリをいれると預金残額瞬時に分かる。

こんなことは普通な社会であるが、アナログの人間には追いついていけない。しかし、単純にこれを否定するのではなく、生活が中に当り前になっているこの現実で、何が自分にとって必要か考えてみるのがもっと大切だと感じた一日の私にとって大事件だった。先週に続きICTに振り回された。(笑)

# 園長・瞑想？迷走記

## 一食育一

「舟和のホームページより」→



松崎保育園で、子どもたちがトウモロコシの皮をむいている。部屋はトウモロコシの皮をむいた匂いで充満している。保育者、栄養士がにこにこして見守っている。今日は、トウモロコシを使ってなんの料理がでるのだろうか。

駐車場の横に芋畑があり、すくすく育っている。芋が出来たら色々と料理をするのだろうかと思案すると楽しくなる。

そこで、東京に行く機会があり、職員に芋料理のヒントを得て頂きたいと思い東京・浅草の老舗の舟和の芋羊羹を購入してきた。まずは老舗の味を体験して欲しいと思った。

今月の「キリスト教保育」は食の特集だ。「心と体を育てる食育 食事の楽しさを・美味しさのために」と小論が掲載されていた。何よりもまずは職員が「食事の楽しさを・美味しさ」を。それを導くのも園長の瞑想・迷走と。

## 日毎の糧



聖書：あなたは永遠に支配なさる。

主は倒れようとする人をひとりひとり支え

うずくまっている人を起こしてくださいます。



詩篇145：13-14

### ルターの言葉から

ダビデは、「恵みと慈しみ」によって意味しているもの、すなわち、「主の家に永久にとどまることができること」をここで示している。

『慰めと励ましの言葉 マルティン・ルターによる一日一生』湯川郁子訳 徳善義和監修 教文館

### 主は、慈しみはとこしえに

145篇は、138篇から始まった「ダビデの詩」の最後の詩編である。イスラエルの歴史、出エジプト、捕囚の出来事が背景にある非常に整えられた神へのあふれんばかりの賛美の詩である。前半部分は神の具体的なことでなく、一般的な讃美がされるが、後半は、具体的な神の働きについて讃美されていく。

アルファベットによる詩編であるから教育的なものであるが、ユダヤ教では日毎の讃美、礼拝で使われていた。古代教会もやはり、用いられてきた。讃美歌6番のニコル・グリーブ作はこの詩篇から生まれた。

「主は倒れようとする人をひとりひとり支え／うずくまっている人を起こしてくださいます。」とは、いつも弱く、苦難に満ちたイスラエル人の歴史だった。倒れようとする、うずくまっている痛みを味わった人が絞り出す詩となって出てき体験をした神の民は、もう一つの歴史事実、「主は倒れようとする人をひとりひとり支え／うずくまっている人を起こしてくださいます。」も体験した。

この神の出来事の中に私たちは永遠に支えられている。

参考：「詩編の思想と信仰VI」 月本照男 新教出版

祈り：倒れようとする、うずくまっている私を支え、起こしてくださるあなたがおられることを信じられますように。アーメン。

## 甘木通信

4:9 ひとりよりもふたりが良い。共に労苦すれば、その報いは良い。4:10 倒れれば、ひとりがその友を助け起こす。倒れても起こしてくれる友のない人は不幸だ。・・・人間にとって最も幸福なのは、喜び楽しんで一生を送ることだ、と。コヘレト4：7～12



福岡空港に着き、電子機器が使えるというアナウンサーと同時に次男から山口さんが天に帰られたという知らせがあった。私にとっては、ひとりよりもふたりが良い。共に労苦すれば、その報いは良いというまさにその人だった。東日本大震災の後、幼稚園の耐震工事、新築のとき代議員として一緒に取り組んで、募金の事務的仕事をし、一年で仕上げた。礼拝（朝、夕礼拝）、聖書の学び、他の集会は皆勤賞であった。課題の多い、重い信徒の方に牧師に代わり寄り添い、相談に乗ってくださっていた。また、教会に来られない、来ていない人に一緒に一言の言葉を加えて、週報を発送した。散逸した教籍簿を一つに纏める作業もした。そのとき、昔の信徒の話、教会の出来事を話してくださるのが喜びであり、楽しかった。人間にとって最も幸福なのは、喜び楽しんで一生を送ることだと感じた。毎週、木曜日、いつもおにぎりを持って来て下さり、午前中、一緒に教会・幼稚園の庭の手入れをし、木の下でおにぎりを食べながらいろいろな話をした。ひとりよりもふたりが良い。共に労苦すれば、その報いは良いと感じさせてくださった。「福音に最後まで忠実」であり、「よくよくあなたがたに言うておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」という人に神さまによって変えられた信仰者だった。奥さん曰く「先生とは、主人と一緒に長くおられましたね」。体の一部がもぎ取られていくようで、悲しさを超える。天に食卓あり。おにぎりを頬張りながら。

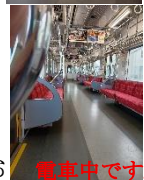
(甘木日記)金) 土) 羽村幼稚園理事会、評議員会も終わった。台風の影響も少なく無事に福岡に着く。日) 早朝、甘木に行く。主日準備、掃除。礼拝後、「幼稚園の将来について」、信徒会。役員会。みなさんに感謝。月) 教会で憩える場を作りたく食品衛生責任者資格を取りに行く。夜は伝道集会のコンサート。みなさん協力を感謝。火) 日善幼稚園運営委員会。午後から葬儀のために東京に。水) 葬儀後、久留米に帰るが雨が酷く警報が出る。教会が心配だ。木) 松崎保育園、甘木教会へ。自動車保険の加入で、世の中が大変化しているのを実感。金) 久しぶりに日善幼稚園。

**おまじ・牧師のぐち**（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。  
はぐちらない聖人（牧師）もいますが。

**金**) 台風で休園したが、朝、園に向かう。12時の飛行機で台風の影響を受けて雨の中を東京に向かう。午後、家内から頼まれた孫へのプレゼント渡しに行く。いつもなら玄関で失礼するが雨で濡れ、汗をかいていたので家にあがる。孫たちの様子を見ながら、息子と嫁の子育てを自分たちのことと重ねながらしばらく楽しむ。家内はよく息子らを大切に育てたと感謝いっぱいになる。その後、病院に大切な方をお見舞いに行く。駅で地震アラーム。**土**) ルーテル羽村幼稚園の評議員会、理事会、台風の影響を考え、zoomでも行う。慣れない会議で疲れる。zoom会議がスムーズにいくように器具を揃える必要があると思った。帰りの飛行機が飛ぶかどうかを心配しながら空港へ。飛行機が福岡空港に着き、電子機器が使えるようになったとたん、尊敬する信仰の朋が帰天した次男から電話。体の一部がもぎ取られていくようで、悲しさを超える。長男に葬儀へ行く飛行機券を取ってもらう。**日**) 5:46の電車で甘木へ。終点では私一人。準備しているとあっと時間が過ぎていく。仕事着であったので礼拝に来られた高校生に「今日の礼拝は休みですか」と言われた。一時間前には牧師に変身してお迎えしなければと反省した。90歳の信徒さんが足の骨を折って休まれていたが、礼拝に来られた。回復力に驚き。幼稚園の将来を考える信徒会、役員会と続く。召天された方の奥様に電話をする。「先生とは、主人と一緒に長くいましたね。」と。**月**) 将来の教会の構想を考え「食品衛生責任者」の資格を取りに行く。夜、聖霊降臨後特別集会。

「夜のやすらぎ、チェロコンサート」を開催。小さな子からお年寄りが喜びの顔で帰って行った。**火**) 幼稚園運営委員会後、葬儀のために東京に。**水**) 葬儀。ひとりよりもふたりが良い。共に労苦すれば、その

倒れれば、ひとりがその友を助け起こす。・・・人間にとって最も幸福なのは、喜び楽しんで一生を送ることだ、と。というまさに信仰の友だった。**木**) 朝から雨が気になり日善幼稚園へ電話して打ち合わせ。午前中は松崎保育園で職員の聖書の学び（詩篇について）、園児の礼拝（今月の聖句「求めよさらば与えられん」）。その後、業務のことで羽村幼稚園とzoomで打ち合わせ。午後から甘木教会へ。自動車保険の手続きで驚き。申し込みもバーコードを使う。スマホがなければ申し込みも出来ないか。そんな途中に変なSMSのメッセージが入ってきて、てんやわんや。**金**) 久留米風習、大きなたなばたスイカを子どもたちは食べる。曇り。



電車中です。

